7/25 朝日

「世界の終わりこんな感じなのか」

ウクライナ侵攻1カ月

ロシア軍がウクライナに侵攻してから約1カ月。この間に、1千万人以上が家を追われて国内外で避難している。ポーランドに近い西部の街リビウには、激しい攻撃を受けた戦火の故郷を、命からがら逃れてきた人も少なくない。 ▼1面参照

食事は1日1回

ロシア軍による包囲が続き、深刻な人道危機が懸念されている南東部の港湾都市マリウポリ。ウクライナ人の男性セルゲイさん(48)は、妻(44)と娘(17)の3人で16日に脱出し、リビウに来た。母親や妹の行方がわかっておらず、ロシア軍による拘束を懸念して、職業やフルネームは明かさなかった。

ロシア軍によるマリウポリの包囲は3月初旬から始まり、一気に状況が悪化した。

電気、インターネット、水道、ガスが順に止まっていった。食料は手に入らなくなり、食事は1日1回だけになった。朝起きると、自宅前の空き地で木材を使って火をおこし、近所の人に分けてもらったジャガイモやタマネギでスープを作った。主食のパンや肉はなくなった。

砲撃や空爆のなかを20分ほど歩いて湧き水をくみに行くことが日課になった。

誰かが亡くなっても葬式はできず、空き地や庭に穴を掘って遺体を埋める光景を目にした。家族のいない老人や病気の人は、食事も治療もなく、人知れず死んでいったという。「世界の終わりとはこんな感じなのかなと思いました」

ロシア軍による攻撃は日に日に激しさを増した。マリウポリでは産科病院や約1千人が避難していたとされる劇場まで標的になった。地元当局が配る菓子をもらうために親子連れが並んでいたスポーツ施設では、セルゲイさんが通りかかった15分ほど後にロシア軍の攻撃があったと聞いた。並んでいた人たちの安否はわからない。

自宅から50メートルほどの場所が砲撃されていたセルゲイさんは16日、ヒッチハイクで運良く車をつかまえ、街から脱出。リビウにたどり着いた。

セルゲイさんは「すべてはロシアのせいだ」と憤った。

「空っぽの感情」

マリウポリと同様に、ロシア軍の激しい攻撃を受けたのが首都キエフの北東約130キロの街チェルニヒウだ。大学生のアルテム・スクラトフスキーさん(19)は母親のガリーナさん(43)とここから逃れ、20日朝にリビウにたどり着いた。一時的に滞在するアパートを探していた。

ロシア軍の侵攻から1週間は、攻撃はあったものの、電気も水道も利用できたため避難は考えていなかった。

ところが、状況は次第に悪化。夜になると、午前0時と同4時ごろにほぼ毎日、戦闘機が飛来して街は爆撃された。ロシア軍には攻撃の「スケジュール」があるように感じた。

昼間は砲撃があり、住宅や図書館、ホテルなどの民間施設も標的になった。当初は地下シェルターに逃げたが、暖房に耐えられない。いつでも逃げられるよう、自宅の廊下で防寒着を着たまま寝るようになった。

しばらくすると、電気も水道も止まった。警報も鳴らなくなった。さらに不安になったのが、携帯電話の電波が入らなくなり、インターネットで情報収集ができなくなったことだ。

砲撃があってもスーパーの前でパンを入手するため4～5時間並んだ。その後、井戸のある家に水をくみに行き、発電機を持つ人の家で携帯電話を充電する。これで1日が終わった。

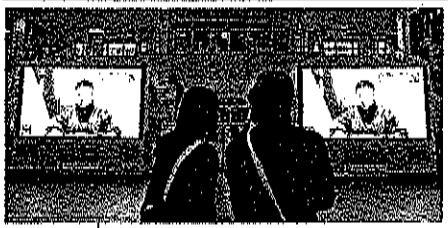
野菜を最後に食べたのは「いつか覚えていない」。砲撃していたパスタや豚肉を食べ、ガスで沸かした湯をペットボトルに詰めた。スクラトフスキーさんが避難した時、30世帯が暮らしていたアパートは、残り5世帯になっていた。「この1カ月、生きることで精いっぱいで、『空っぽの感情』だった」と言った。

リビウ中心部で子どもたちが遊ぶ大きな公園を見て、スクラトフスキーさんはこうつぶやいた。「チェルニヒウにも、市民が憩うための美しい公園があるんです。早く、元の生活に戻りたい」 （リビウ＝酒野裕介）

庭に埋葬　電気もネットも水も止まった

◎ウクライナ南東部マリウポリで20日、ロシア軍の侵攻による犠牲者の墓を掘る人々◎22日、マリウポリから避難し、近隣のザポリージャで休む子どもたち＝いずれもロイター

83歳の被爆者「ひとごとじゃない」



JR大阪駅前の街頭ビジョン前で、ウクライナのゼレンスキー大統領による演説を見る人たち＝23日午後、大阪市北区、林敏行撮影

ゼレンスキー氏演説

ウクライナのゼレンスキー大統領が23日、日本の国会でオンライン演説した。 ▼1面参照

大阪・梅田では中継映像が大型モニターで流れた。大阪府八尾市の会社員宋松鶴和さん(57)は「日本が何ができるのかを考えるために必要だった」と受け止めた。

ゼレンスキー氏は演説でロシアへのさらなる圧力を求めた。高槻市の会社員男性(56)は「圧力をかければ国民の生活にも影響がでる。（日本政府は）冷静に判断してほしい」。茨木市の会社員女性(47)は「戦争を終わらせるために何ができるのかを考えて」。

6歳の時に広島で被爆した田中登子さん(83)＝広島市東区＝は演説に耳を傾け、「ひとごとじゃない」と語った。2012年にウクライナを訪問した。現地の人たちの顔が思い浮かんだという。

ゼレンスキー氏はロシアが核兵器を使う危険性に言及した。田中さんは「原爆を体験している者として惨状はわかる。核兵器禁止条約を推進していくことが今こそ大事」と訴えた。（宇沢知海、岡田将平）